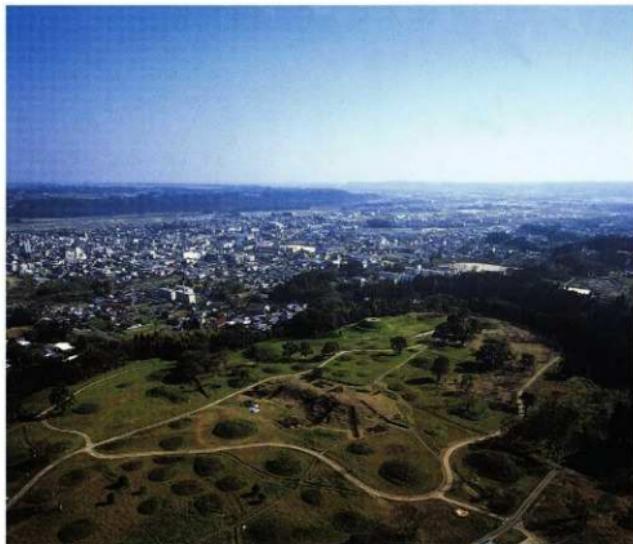


特別史跡

さいとばる
西都原古墳群

発掘調査・保存整備概要報告書（IX）



2005.3

宮崎県教育委員会

序

西都原古墳群は、全国有数の巨大古墳群として、昭和27年に国の特別史跡に指定されました。さらに、昭和40年代には「風土記の丘」整備事業の第1号として史跡整備の先鞭を付け、以来自然景観と田園風景に調和した秀麗な古墳群として高い評価を受けてきました。

さて、県教育委員会では、平成7年度より、大阪府池上曾根遺跡とともに文化庁の「地方拠点史跡等整備事業（歴史ロマン再生事業）」の助成を受け、新たな整備事業に着手し、平成14年度をもって事業の終結となりました。しかし、平成15年度から「歴史ロマン再生空間形成事業」として、引き続き古墳群の整備事業に取り組んでいるところです。「風土記の丘」整備事業から4半世紀あまりの時を経て、再び全国に先駆けて整備事業に着手できましたことは、地元の皆様をはじめ関係者の熱意の賜物であるとともに、古代史の謎を秘める西都原古墳群の存在が、全国的に注目を集めている証拠と言えます。

本年度は、46号墳、111号墳、170号墳の発掘調査を行い、新たな情報、さらには、今後の整備に向けた数多くのデータを得ることができました。整備においては、169号墳の復元整備工事を行い、本年度で完成をいたしました。また、平成16年4月には、古墳群内に「県立西都原考古博物館」がオープンし、古墳群とともに学校教育や生涯学習の場、さらに、遺跡や文化財に対する認識や理解を深める場となることを期待いたします。

最後に、本事業を推進するにあたり、深い御理解・御協力を賜った地元住民の方々をはじめ、指導委員会の先生方、関係者の皆様に対して心よりお礼申し上げます。

平成17年3月

宮崎県教育委員会

教育長 高山耕吉

本文目次

序	1
例言	2
第Ⅰ章 調査及び整備の経緯	4
第Ⅱ章 46号墳の調査	6
第Ⅲ章 111号墳の調査	11
第Ⅳ章 170号墳の調査	15
第Ⅴ章 169号墳の復元整備	18

例　　言

- 1 本書は、文化庁の補助を受け、宮崎県教育委員会が平成15年度から19年度の5カ年に実施する「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」の平成16年度の概要報告書である。
- 2 事業は宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県立西都原考古博物館が実施した。保存整備工事は宮崎県都市公園総合事務所に予算を分任し実施した。
- 3 工事の実施設計・監理は、(株)文化財保存計画協会に委託した。
- 4 本書の執筆は、第Ⅰ～Ⅳ章を二宮が、第Ⅴ章を東が行った。
- 5 調査および保存整備にあたっては、西都原古墳群保存整備指導委員会の委員や特別調査員の先生方に御指導をいただいた。また、西都市教育委員会には御協力をいただいた。記して感謝する。
- 6 調査で出土した遺物は、県立西都原考古博物館において保管している。



西都原古墳群全景

第Ⅰ章 調査及び整備の経緯

第1節 調査及び整備に至る経緯

大正元年～6年にかけて実施された、日本初の合同学術調査において、西都原古墳群では30基の古墳が調査されている。この調査は、総合的な視点での古墳調査ではなかったものの、出土遺物の質・量という観点からは、今だ学史に残る成果が得られている。この調査以後、西都原古墳群に対する保存意識の高まりは大きくなり、昭和9年の国史跡指定に始まり、昭和27年の特別史跡指定、そして、昭和41年～43年には全国第1号となる『風土記の丘』として整備された。

昭和41年～43年にかけて行われた『風土記の丘』整備事業の後、史跡保存を目的として、約30年の眠りについていたが、再び西都原古墳群を整備し、「保存」から「活用」へ視点を向けた整備計画を実施することとなった。

新たな整備事業では、平成5年度～6年度での「西都原古墳群保存整備検討委員会」の設置および「西都原古墳群保存整備活用に関する基本計画」の策定に始まり、平成7年度～9年度での「大規模遺跡総合整備事業（歴史ロマン再生事業）」、平成10年度～14年度での「地方拠点史跡等総合整備事業」において、測量調査、発掘調査、施設建設などを実施した。平成7年度～14年度の5ヵ年計画で実施された整備事業であるが、さらに平成15年度から5ヵ年計画による「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」として、西都原古墳群の発掘調査、復元整備を継続して実施している。

また、平成16年4月には、古墳群全体をフィールドミュージアムとして捉えた「県立西都原考古博物館」がオープンし、古代日向を通して、広く国内外の歴史情報を受発信している。

第2節 整備事業の経過

「西都原古墳群歴史ロマン再生空間形成事業」では、平成15年度に46号墳（前方後円墳）、111号墳（円墳）、169号墳（円墳）の発掘調査を実施し、寺原第2支群の環境整備、芝貼による169号墳の復元整備工事、4号地下式横穴墓（111号墳）の見学カメラの設置を行った。

本年度は、前年度に引き続き46号墳、111号墳の発掘調査を行い、新たに170号墳の調査を開始した。さらに、169号墳の復元整備工事を引き続き実施し、今年度で終了している。

平成7年度～14年度までの整備事業は、既刊行の概要報告書に詳しいので、そちらを参照されたい。



第1図 西都原古墳群全図及び発掘調査・保存整備古墳位置図

第Ⅱ章 46号墳の調査

第1節 古墳の立地

46号墳は、西都原台地の南東部に展開する第1古墳群のほぼ中央に位置する。周辺には、北に72号墳、東に56号墳、南に1号墳、13号墳、36号墳、西に202号墳の前方後円墳が分布する。

第2節 調査の概要

46号墳は、後円部を西に向かた、ほぼ東西に主軸を持つ前方後円墳である。調査の結果、墳丘規模は、全長約84m、後円部径約50m、前方部前面幅約35m、くびれ部幅約19mを測り、後円部3段、前方部3段により築造されることが確認できた。

葺石は、保存状態が良く、後円部・前方部ともに各段すべての斜面部で確認ができる。3~10cmの大の川原石を用いることを基本として、約1.5mの幅で区画された間に葺かれている。また、各段の斜面部端には20~50cm大の石による根石列がみられ、最下段の根石列の約0.9m外側には、さらにもう1重の根石列があり、最下段では、根石列が2重にまわることが確認された。

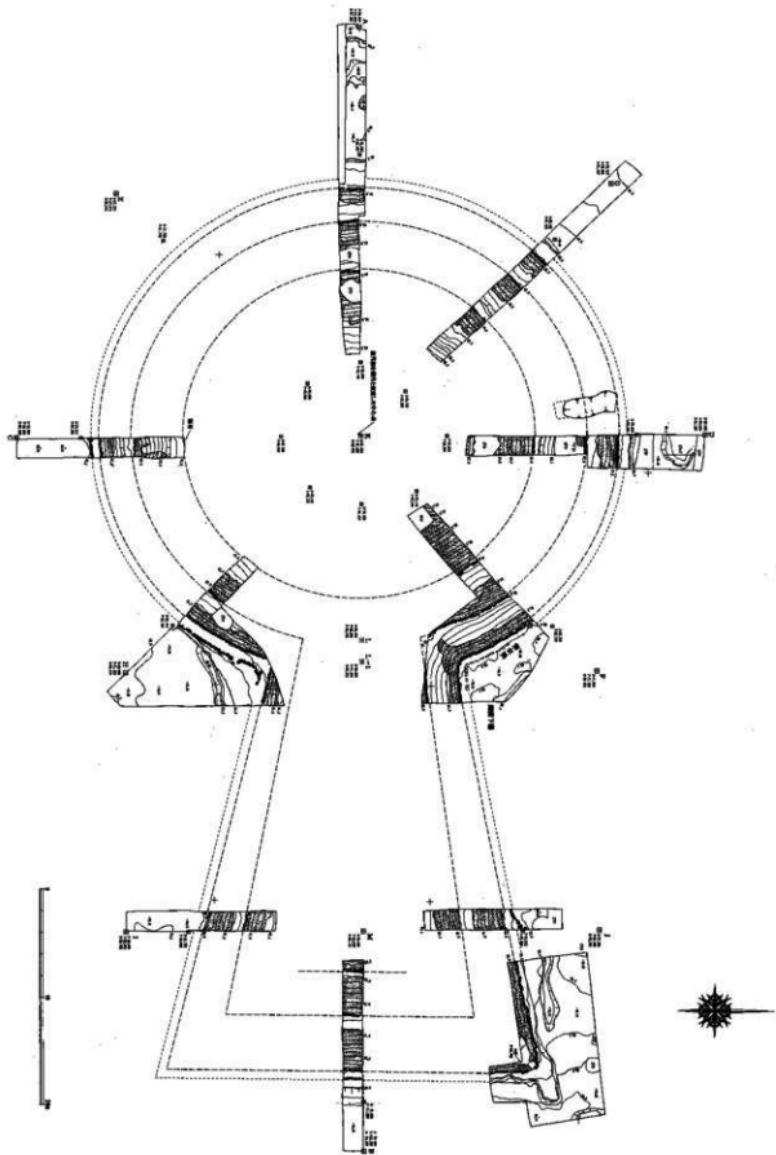
周溝は、後円部の北側と前方部前端のトレンチのみで確認ができた。最下段根石列から約1.5mのところに内肩がみられ、深さ約0.4mを測る。ただし、外肩は明瞭な立ち上がりを設けていない。また、北隅角には、舌状に伸びる張り出し部が存在する。

遺物は、ほとんどが表土掘削中に出土したものである。壺と考えられる土師器片が少量出土しているが、時期を明確にするものはない。

後円部北側のほぼ中央付近に、墳丘裾部から内部に向け開口する横穴が存在する。今回の調査の結果、防空壕のために掘削されたものであることが判明した。また、防空壕内部の断面を確認したところ、墳丘最下段は、地山削り出しにより整形されていることが確認できた。

第3節 小結

46号墳は、大正時代に発掘調査は実施されておらず、今回が初めての発掘調査となった。調査では、墳丘規模が確定されたこと、後円部・前方部ともに3段築成であること、最下段の根石列が2重にまわることなどの新知見が得られた。今後も多角的な調査を実施することで、さらなる成果を得るとともに、整備保存に向けての充実したデータ収集に努めたい。



第2図 46号墳葺石残存状況及びトレンチ配置図 (S=1/400)



46号墳 全景(上が東)



46号墳 北側隅角周辺



46号墳 北側くびれ部トレンチ完掘状況



46号墳 南側くびれ部トレンチ完掘状況



46号墳 後円部北側トレンチ



46号墳 葦石検出状況

第Ⅲ章 111号墳の調査

第1節 古墳の立地

111号墳は、西都原台地の北部に展開する第3古墳群の最南端に位置する円墳である。標高は現状で約65mを測る。昭和31年に墳丘の南側裾部で農耕馬が落ち込むことで、地下式横穴墓（4号）の存在が明らかとなった。当時の調査で、玄室内に玉類、鏡、直刀、鐵鏃、短甲などが副葬されていましたことが確認された。また、平成14年度には、地下式横穴墓の保存整備のために、再調査を実施した。周辺には、多くの円墳が散在し、南西には陵墓参考地である男狹穂塚、女狹穂塚の両古墳が立地する。

第2節 調査の概要

平成15年度には、墳頂部から8方向のトレンチ調査を行い、墳頂平坦面で随時トレンチを拡張した。本年度は、墳丘部北東1/4を面的に調査を実施した。

調査の結果、墳丘規模は、直径約29.5m、高さ約4.7mを測り、2段により築造されることが確認できた。しかし、後世の搅乱で墳丘1段目はかなりの削平を受けており、裾部から70~80cmを残すのみであった。削平部の断面観察により、墳丘1段目の下半部は、地山削り出しによって整形されていることが判明した。

葺石については、削平を受けた1段目以外では、非常に保存状態が良い。斜面部に葺かれた葺石は、8~15cm大の川原石を使用しており、各段の斜面部端には、20cm大の石による根石列がみられる。残存する1段目の葺石では、約0.6mの幅の区画を持つが、2段目では区画が確認できなかった。

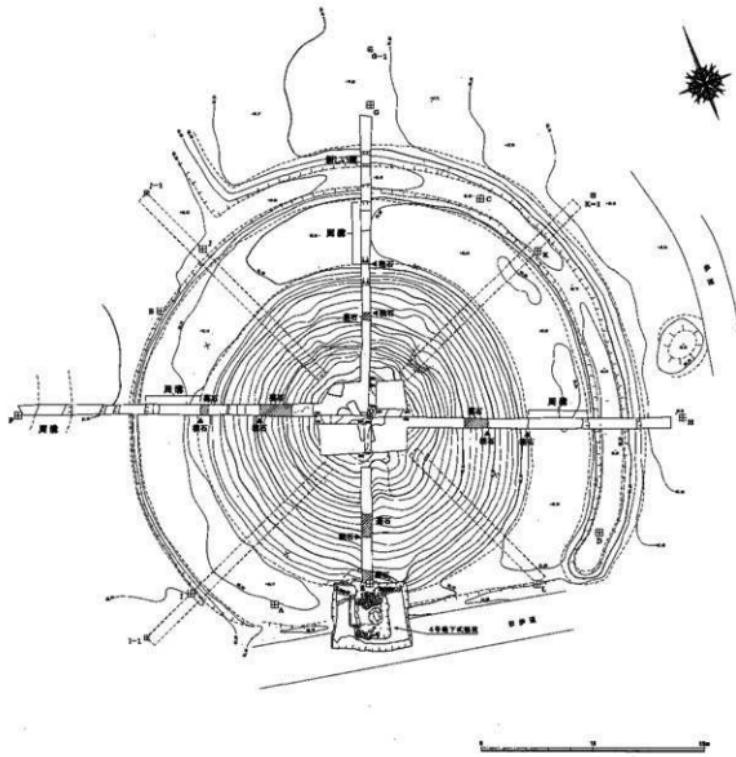
周溝は、明瞭な内肩を持たず、1段目根石列から徐々に深くなり、深さ約0.4m、幅約5.5mを測る。

埋葬主体部は、南周溝に築造された地下式横穴墓以外に、墳頂平坦面にも2基の墓壙を確認した。また、墓壙上面で、須恵器と鉄製品を確認したが、原位置を動かさずに埋め戻しを行った。

遺物は、墓壙上面出土のもの以外では、表土掘削中、あるいは「風土記の丘」整備事業で墳丘整形した盛土内から出土したもので、須恵器片が少量出土している。

第3節 小結

今回の調査では、墳丘規模が確定されたこと、墳丘の1段目が大きく削平されていたこと、墳頂平坦面に2基の埋葬部が存在することなど、新たな成果を得ることができた。しかし、地下式横穴墓と墳頂部墓壙の時期的な問題、墳丘1段目の削平部の整備方針など今後の検討課題は多く残っている。



第3図 111号墳墓石残存状況及びトレンチ配置図(平成15年度)(S=1/400)



111号墳 全景(上が南東)



111号墳 全景(北から)



111号墳 2段目斜面葺石検出状況



111号墳 1段目根石列検出状況

第IV章 170号墳の調査

第1節 古墳の立地

170号墳は、西都原台地の西側に位置する円墳で、「雑草塚」と称される。標高は現状で82~83mを測る。周辺には、北に169号墳、東に男狹穂塚、女狹穂塚の2基の陵墓参考地、南に西都原古墳群唯一の方墳である171号墳が分布する。また、170号墳は169号墳とともに、男狹穂塚古墳の陪塚とされる。

第2節 大正時代の調査

170号墳は、大正元年12月から翌年1月にかけての調査で、埋葬施設の発掘調査が実施されている。墳頂平坦面中央の埋葬施設と推定される場所で、短甲、頸甲、肩甲の鉄製武具、直刀、小刀、鐵の鉄製武器などの副葬品が検出された。また、墳頂部では円筒埴輪、家形埴輪も発見されている。

第3節 調査の概要

今回の調査では、墳丘中央から放射状に8方向のトレンチを設定したほか、墳丘南西側にトレンチ1本を設定して調査を実施した。

調査の結果、墳丘規模は、直径約48m、高さ東側約4m、西側2.5mを測り、2段により築造されることが確認できた。東西での高さの差は、西から東にかけて緩やかに傾斜するためにおこる。この規模のため、墳丘形態は直径に比べて高さが低く、非常に低平な形状となる。墳丘1段目は地山削り出しによって整形されている。

葺石は、どのトレンチにおいても見られず、170号墳は葺石を持たないことが確認された。

周溝は存在するが、後世の削平が著しく、規模を確認することはできなかった。

遺物は、墳頂部の北東・東・南東側縁辺部で、円筒埴輪列の一部を検出した。合計6本の円筒埴輪が原位置で確認できた。墳頂部縁辺に約50cm程度の間隔をあけて円筒埴輪が樹立されていたものと推定される。円筒埴輪の時期は、川西編年Ⅲ期に比定される。

第4節 小結

今回の調査では、墳丘斜面部に葺石を持たないこと、墳頂部縁辺部には埴輪列が見られるが、1段目テラスに埴輪を樹立していないこと、墳丘の直径に対して低平な墳丘形態をなすことなどが確認された。築造の時期は、隣接する169号墳とほぼ同時期と推定されるが、169号墳にはみられない特徴も目立つ。両者の相違の意味については、今後の調査での検討課題としたい。



170号墳 全景（北から）



170号墳 大正時代調査トレンチ検出状況



170号墳 北側トレンチ完掘状況



170号墳 墳頂部円筒埴輪検出状況

第V章 169号墳の復元整備

第1節 169号墳の調査概要

169号墳は男狹穂塚の陪塚で、大正元（1912）年に関保之助、増田于信により発掘調査されている。その際、墳頂平坦面から家形や青形の器材埴輪片、鉄製武器、銅劍、珠文鏡、竹製櫛等が出土している。埴輪片の一部は、昭和に入って船形と子持家形に復元され、重要文化財の指定を受けている（東京国立博物館所蔵）。

平成10年度から整備に向けた発掘調査を開始し、15年度までに終了した。調査では、墳丘中心から8方向に設定したトレンチにより表土層（古墳築造後の堆積土）の状況を確認し、その後に墳丘全体の表土を除去して本来の墳丘面の確認を行った。

墳丘の全体で葺石が検出されたものの、その残存状況はあまり良好ではなく、墳丘3段目では根石と目地状の区画列のみが残る状態であった。

また、大正時代の調査トレンチを確認した外、墳頂平坦面及び各段テラス面で底部のみが残存した状態の円筒埴輪片が検出された。

周溝部については、トレンチ調査により多くの埴輪片が出土し、若干の張り出しが認められた墳丘南東側（男狹穂塚側）を中心に約3分の1程度を発掘した。

第2節 復元整備

復元整備にあたっては葺石の残存状況を考慮し、また、造構面の保護を最優先するため、本来の墳丘面や葺石を露出させず、約30cmの厚みの保護土で覆い、表面は芝貼り仕上げとすることとした。外形としては、墳丘築造当時の姿に戻すこととした。

墳丘形状の復元のため、残存する葺石面や根石位置、円筒埴輪列の位置等を参考に、墳丘各段の傾斜角とテラス幅等を推定し、8方向の断面図を作成した。

周溝部については、本来の周溝底まで約1～1.5mの堆積土が確認された。現状では、墳丘第1段の下半部が周溝の堆積土に埋まっているが、整備後の雨水の処理、墳丘や周溝外面の土の崩落・流出を防ぐことを考慮し、現状の高さのまま表面整地を行い、野芝貼りとすることとした。

また、本来の墳丘規模を示すため、墳丘第1段の裾部の位置に、葺石の根石と同大同形状の石を5mおきに設置することとした。

復元設計は平成14年度に行い、工事は15・16年度の2カ年に分けて実施した。

なお、調査時に検出された転落した葺石は、現地に保存する意味から、調査を行った周溝部に埋め戻した。



169号墳 発掘調査時全景



169号墳 復元整備完了全景（上が南東）

報告書抄録

ふりがな	とくべつしせきさいとばるこふんぐん はっくつちょうさ・ほぞんせいびがいようほうこくしょ						
書名	特別史跡西都原古墳群						
副書名	発掘調査・保存整備概要報告書						
卷次	IX						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編集者名	二宮満夫・東憲章						
発行機関	宮崎県教育委員会						
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目9番10号						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
西都原古墳群	西都市大字三宅	45208			2004.8 5 2005.3		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
古墳	古墳	46号墳 蓋石 111号墳 墓壙、蓋石 170号墳 円筒埴輪列	土師器 須恵器 鉄製品 円筒埴輪				墳頂平坦面に2基の墓壙

特別史跡
西都原古墳群
発掘調査・保存整備概要報告書（IX）

2005年3月

発行 宮崎県教育委員会
編集 宮崎県立西都原考古博物館
印刷 秀巧社印刷(株)
